

言語研究法 ('19)

第4回 音韻論① 4-1

1

言語研究法 ('19) 第4回 音韻論①

音素と音韻現象

<第8講> (!順番注意!)

2

今回のポイント：音素って??

- 「音声」のほかに「音素」が必要なの？
- ↑ 見ているもの（次元）が異なるので
 - 音声は“ナマの音”
 - 音素は“音の使われ方”でまとめたラベル
- ↑ 音素で見ると説明できる現象がいろいろ

3

音素の定義

音素とは、
語を区別することのできる最小の単位

↓

音素は次のような性質をもつ

- ① 音素が異なると別の語になってしまう
- ② 音素が同じなら、客観的には異なる音声でも、
機能的には同じ音とみなされる

4

具体的に①

Q. 下はすべて日本語に実在する異なった単語です。
「あい」「かい」「さい」「たい」「ない」
「はい」「まい」「やい」「らい」「わい」
これらの例からいくつの音素が取り出せそう？

ヒント：
とりあえず音声記号で書いてみると？
(音声を書くときは [] のカッコを使う)

言語研究法 ('19)

第4回 音韻論① 4-1

5

答え①

A.

[ai][kai][sai][tai][nai][hai][mai][jai][rai][wai]

- 音の違いは以下のとおり（赤字部分）

[ai][kai][sai][tai][nai][hai][mai][jai][rai][wai]

- これらが違うことで違う単語になっている
→ /k s t n h m j r w/ という音素を取り出せる？
（音素を書くときは / / で挟むのが慣習）

6

具体的に②

Q. 次の文で「ラーメン」の「ラ」をいろんな音で
発音しながら読んでみると？

「ああ、ラーメン食いたい。」



[ɾ](弾き音) [l](側面音) [ɭ](そり舌音) [r](ふるえ音)

どれで発音しても「ラーメン」は「ラーメン」

→ 音素としては /r/ が1つあれば足りる

7

小まとめ：音声と音素の違い

音声表記

- 人間の出す音声
（とくに言語音）
- “**ナマの音声**”を記述
- **正確さ**が基本
- **IPA**の利用が基本

[ɕibaɕimihamaku]

音素表記

- ある特定の言語で
区別されている音
- 語を区別する**機能**に着目
- **体系性と合理性**を重視
- 区別のための記号なので
直観的に想起できる記号

/cibasimihamaku/

8

ではちょっと確認を…

Q. 音声表記と音素表記のどちらが向いている？

(1) 2つの言語の音の体系で母音や子音の数を比較する。

→ /音素表記/

(2) ある単語の発音が若者と年配層とでどう違うかを調べる。

→ [音声表記]

(3) 動詞の活用パターンを整理して示したい。

→ /音素表記/

言語研究法 ('19)

第4回 音韻論① 4-3

13

音素の認定①

英語の例：

'cap' [kæp] 'catch' [kæʃ] 'cats' [kæts]

→ それぞれ /p/ /ʃ/ /ts/ という音素？

この例は語末、では他の位置でも同様か？一否。

たとえば語頭では、'pat' [pæt] や 'chat' [ʃæt] はあっても [ts] で始まる単語はない。

→ [ts] は /ts/ ではなく、/t+/s/ という音連続

14

音素の認定②

日本語の例：タ行子音に音素をいくつ立てるか？

考慮すべき基準

音声的類似性＝音素の異音は共通性の大きな音を
(説明的)経済性＝むだに音素の数を増やさない

■方法1：音素 /t/ だけ立てる (/ta ti tu te to/)

経済性○ ← /t/ ですべてまかなう

音声的類似性△ ← 破裂音と破擦音が混在する

15

音素の認定② (続)

■方法2：

破裂音素と破擦音素を立てる (/ta ci cu te to/)

経済性△ ← 音素は増えるが拗音カバでできず

音声的類似性○ ← 破裂音と破擦音が区別できる

■方法3：

音声 [t] [tʃ] [ts] をすべて音素に (/ta tʃi tsu te to/)

経済性× ← 音声と音素が同じ数になる

音声的類似性△

← /tʃ/ は拗音を表せるが、/ts/ は音声1種類

16

音素の認定② (続々)

外来語への対応

■方法1：音素 /t/ のみ

ティとチ、トゥとツが区別できない → ×

■方法2：破裂音素 /t/ と破擦音素 /c/

ティとチ、トゥとツが区別できる → ○

■方法3：音素 /t/ /tʃ/ /ts/ が立つことに

ティとチ、トゥとツが区別できる → ○

言語研究法 ('19)

第4回 音韻論① 4-3

17

音韻現象①：同化

「同化」 前や後ろの音に影響されて、それらの音の性質（の一部）を受け継ぐ現象

- 日本語（共通語）の母音の無声化
「きし(岸)」 「くし(串)」 「ひし(菱)」 「ふし(節)」
[kɪɕi] [kɯɕi] [ɕiɕi] [hɯɕi]
→ 狭母音 /i u/ が無声音に挟まれるとなりやすい
(母音の下に白丸を付けるのが無声化の記号)

18

音韻現象①：同化（続）

「順行同化／逆行同化」
各々、同化を引き起こす音が前／後ろにある場合

- 順行同化の例：助動詞「た」の発音
動詞の語幹末が有声音で「だ」になるケース
例：飲む /nom-/ + /ta/ → [nonda]
- 逆行同化の例：フレーズ化に伴う無声化（英語）
例： have to, has to, used to; of course
[f] [s] [t] [f]

19

音韻現象②：中和

「中和」 本来は最小対を持ち対立している複数の音素が、ある条件のもとで対立を失う現象

- 現代ドイツ語の語末における /t/ と /d/ の中和
例： bunt “色鮮やかな” Bund “結びつき”
どちらも発音は [bunt]
- 日本語における語義の中和
「行く」「来る」「いる」の対立が敬語形で中和
→ 「いらっしゃる」 1語に